月の塵

Koda Aya 幸田文

月の塵
幸田文
© Tama Aoki, Takashi Koda 1997

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1997年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——信毎書籍印刷株式会社
印刷——信毎書籍印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263488-0

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆
藏书章

月の塵

幸田 文

講談社

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

月の塵

残された言葉……12
花ゆかた……16
赤糸のおもしろさ……19
個人教授……22
台所の音……29
買いもの……33
顔……41
ふり将棋……50
みなおもしろの旅……54
祝い好き……57
そらまめ……60
かたづけ……64

月の塵……67
遺品のあるなし……72
上野谷中……78
露伴全集のこと……82

くさ笛

塔……88
胸の中の古い種……96
上棟……110
たねを播く……116
樹容……124
ふたば……126
杉柴の道……128

倒木……133
くさ笛……137

てればなし

机辺……152
雪の稲穂……161
春寒……166
くせ……174
てればなし……185
からす……193
古い友だち……202
えだ豆……209
いたみ……218

ありなし川……227

あとひき桜

あらしの余波……236
しめごこち……250
ぬり箸たけ箸……256
好きなこと好きなもの……269
春うごく……275
きいろい花……280
たまの好い日……284
台所……289
下手な天ぷら……292
花おさまり……296

雪……300
ひょうたん……305
葬式じょうず……313
耳かき……317
老後のしあわせ……320
あとひき桜……329
ちどりがけ……334
一生もの……338
あだ名……343
金魚……348
むかし正月いま正月……353
秋の音……358
遠花火……363
五官の教え・森まゆみ……365

月の塵

幸田文随筆集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

本書は一九九四年四月小社より刊行。

月の塵

残された言葉

そのとき父は八十一歳で、重く病んでおりました。看護している私は、四十四歳になっていました。

あとから考えあわせれば、父はもうその病気のはじまる以前に、すでに時の来ていることを察していた、と思われるふしぶしがあります。八十を過ぎる高齢なら、これは本人のみならず誰が考えても、おなじ思いが浮いてくることだとおもいます。それなのに私はまるで馬鹿みたいに、もう一度持ちなおしてくれるものと、ひたすらに思いこんでいるようなところがあって夢中になって看病していました。でも、実際は夢中すぎて、ぼんやりした看病だったと、あとではそう思っていますが——。

そういう重態のある日、父は私に、おまえの性格のなかには、生みの母より育ての母のほうが多くうつっている、といいました。そしてその実例をあげて、似てい

るゆえんを指摘しました。それは殆ど、欠点についてでした。一々こちらにこたえのある、ほんとのことばかりでした。しかも顔や形はちがっていても、性格をうつしていれば、もの言い、そぶりは似るし、言語動作が似れば顔つき姿つきまでも、おどろくほど似てみえるときがある、というのです。

私は実はどきっとさせられ、ついでひどく不愉快になりました。数え七歳で死別した生みの母をなつかしみ、三十何年間も母娘と呼び呼ばれてきた育ての母へは、疎んじる気を多分にもっていたからです。それに、性格は血によるものが多い、となんとなくそう思って疑わずにいたからです。私はそう言われて落ちつけなくなり、むかむかするし、しかし、どう口をはさむことも、どう言いかえすこともできずに、きいていました。

その晩、親しい人に看病の手代りをたのんで、私は暫く眠りましたが、なんどとなく揺りおこされました。淋しげな悲しげな表情で、育ての母がしきりに私にものを言いかけている夢をくり返してみるのです。母も淋しげでしたが、私もいいようのない淋しさでした。夢の中でも、揺りおこされたあとも、なんともいえない淋しさでした。そのうち夜があけました。しみじみ、暁方というのもまた淋しいものだ、と思って眺めた記憶が残りました。

口のきけなくなる、そのほんのちょっと前に、父は私に必要なことを、はっきり言いのこして逝ったのだと、私は解釈しています。教えられたのは「母の座」というものだと思います。心浅くきくと、父は後妻の性格の欠点を数えあげ、こころよく思っていなかったことを、立証していったようにも受取れますし、また、そのひとに似て芳ばしくない性質の私を、なげいて言ったようにも受取れます。けれどもその口調を思えば、そんな感情的なものではないようです。父には先妻であり後妻であり、私には生みの母育ての母になる、その二人のおんなが、どういうように私に響いているかという、いわば計算書のようなものをおいて行ったのではないか。いえ、計算書の一部――マイナス面の部分のみを、声にだして示していった、と思うのです。マイナスだけ指示しておけば、プラス面はおのずから察知できる筈、と踏んでいたのでしょうし、それだけいうのがいっぱいな、体力の限度であったかと思うのです。計算書みたいなものの故に、父自身には感情を混じえない平静なものであっても、父の没後、まだ何年かを先へ生きていかなくてはならない私へ、それはやはりどうしても言いきかせておいたほうがいいと考えた、恩愛の情であり苦言であった、と私は思うのです。

人は生れて死ぬまでに、いくつの座を持つものかと思います。赤ん坊の座、童女の座、学生の、娘の、妻の、母の、祖母の座。いろんな座が与えられます。このうちの母の座というものをそれ以来、ずっと大きく拡げて私はおもい直しています。生んだも育てたも、別はない。母の座は誰にも母の座で、血のつながりも義理のつながりも、結局は一つの母の座であると、四十四歳をすぎて漸く納得したのです。父の言い置いた通り、私は善悪ともに育ての母に似た点を認めますし、別にまた、善悪ともに生みの母に似たところもあると、いまはもう僅かしかいない古い人たちから言われます。似るとは、哀しくも懐しいことです。そして、なんとぴりぴりと痛いことだろう、とおもいます。人も自分も大切にしなくてはならないのは、母の座だと思います。父没後、もう十七年になりますが、私は育ての母にすまないことをしたと、いまもっていたんでいるのです。

（一九六三年五月・親と子）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com